

編集後記：今月号にはシンポジウム記事が3本掲載されています。シンポジウム記事の3本同時掲載は2009年の10月号以来のことのようです。2003年から2012年の10年間をみると、シンポジウム記事は月平均1.4本のところ、4～6月に限っては月平均2.2本となっていました。年度末に研究集会が多く開催されるということとリンクしているのでしょう。特に今年の5月はシンポジウム欄への投稿が多く、担当3名、フル稼働で編集作業（原稿確認）をこなしているところ です。

シンポジウム記事の編集委員による原稿確認では、誤字脱字の有無、参考文献や略語一覧の体裁などの確認を主に実施しています。また、読み易さの観点から著者に改訂をお願いする場合があります。投稿されたシンポジウム原稿は、その受付から概ね1か月程度（分量が多い原稿ではもっと長くかかることもあります）で受理となり、印刷業者に入稿することになります。毎号、この入稿の〆切は前々月の中旬に設定されています。つまり、7月号の〆切は5月20日前後ということになります。この〆切を過ぎてしまうと掲載が1か月先延ばしになってしまいます。

かくいう私、昨年11月にはじめて筆頭著者としてシ

ンポジウム記事を投稿しました。最終的に掲載されたのは今年の2月号。改稿作業に手間取ってしまったこともあり、掲載までに4か月かかってしまいました。投稿から4か月での掲載…。改稿をスムーズにできればもしかしたら1か月は短縮できたかもしれない、との反省もなきにしもあらず…。この経験も踏まえ、最近の原稿確認においては、これら編集スケジュールを著者にお知らせしながら、掲載までの期間を最適化できるよう意識するようにしています。

昨今、ブログやSNSなどのオンラインによる情報発信が盛んではありますが、毎月3000名を超える会員に配布され、多くの気象学者の目に触れる（少なくとも記事表題と著者名は目に入る）ことが確実な印刷媒体「天気」の存在意義は大きいと思います。もちろん、情報発信の即時性という面でオンラインツールに勝てるべくもありませんが、それでも1か月でも早く掲載できるよう工夫を凝らして行きたいと思っています。まだ「天気」への投稿経験のない方、参加した研究集会の内容を簡単にまとめて、まずはシンポジウム欄へ投稿してみたいかかでしょうか。担当一同、お待ちしております。

（青柳暁典）